

北朝鮮文学の最近の変化と南北交流の展望

金 在 湧
波田野節子 訳

一、序 論

北朝鮮の長編小説『黄真伊』が萬海文学賞を受賞したことが契機となって、このところ韓国では、北朝鮮文学に対する関心が高まっている。その一方で、韓国と北朝鮮の作家たちが分断後はじめて作家大会の開催について合意するなど、以前は想像すらできなかった多くのことが現実には起きつつある。この趨勢は今後ますます拡大して、南北文学界の交流と意思疎通が活発になっていくことが期待される。

このような状況にもかかわらず、韓国の文学関係者

たちが北朝鮮文学、とりわけ最近の北朝鮮文学の変化と特徴を具体的に把握しているかといえば、決してそうではない。部分的な言及はあるものの、『苦難の行軍』が公式に終了した一九八八年から現在にいたる北朝鮮文学の変化を、文学史全体から読みとるところまでは、明らかに至っていない。南北の文学界の交流は始まったが、この変化に対する理解を欠いているために、実際の収獲を得ることが難しいだけでなく、朝鮮半島における未来志向的な文学のありかたをとらえきれずにいる。

その意味で、『苦難の行軍』以後の北朝鮮文学にあら

われた最近の特徴を北朝鮮文学史のコンテクストから説明して、韓国文学と統合して理解することは、南北文学の交流のためだけでなく、統一文学樹立のために絶対に必要な作業だと考える。そこで本研究では、一九八八年以後の北朝鮮文学のなかで問題作と思われる三編の長編小説を分析するによって、南北文学の交流の展望を引き出そうと思う。

二、最近の北朝鮮文学の変化と特性

本論文は、大きく二つの部分からなる。まず、「苦難の行軍」以後の北朝鮮文学を、長編小説中心に分析する。この分析を通して、最近の北朝鮮文学がそれ以前とはいかなる点で違っているか、それがいかなる意味を持つのかを検討する。つぎに、最近の北朝鮮文学の変化が南北文学交流にもたらす作用と意味を分析する。南北文学の最近の交流における大きな特徴は、変化しつつある北朝鮮文学を韓国文学が受け入れているという点である。北朝鮮文学による韓国の文学賞受賞が、その端的な例である。北朝鮮文学が以前と変わっ

なければ、こんなことは起こらなかったであろう。

「苦難の行軍」以後の北朝鮮文学は、以前とはまったく違った特徴を示している。国家社会主義の崩壊後に北朝鮮の社会が経験している多様な社会問題、たとえば飢餓の問題や官僚主義などをあつかっている。これは国家社会主義崩壊後の北朝鮮が直面したさまざまな問題について、作家たちが少しずつ発言しはじめていることを意味する。北朝鮮が経験した惨状はすでに周知の事実となっているが、北の作家たちがこの問題に対してどのような反応を示しているかは、ほとんど知られていない。それゆえ彼らが長編小説のなかで見せてくれる多様な場面は、じつに重要な記録といえる。この現象は一般の長編小説だけでなく、金正日委員長の英雄的業績を小説化するために企画された「不滅の嚮導」叢書のなかにさえ、部分的とはいえ見られるほどである。こうした点から見て、北朝鮮の文学の変化は以前のそれとは比較にならぬほど深刻といえる。

本研究では、「不滅の嚮導」叢書の長編小説と一般の長編小説の二つに分けて分析し、一般の長編小説につ

いては、同時代を背景としたものと前近代を背景にした歴史小説の、二つに分けて分析する。このように分けるのは、北朝鮮文学の最近の変化の様相と特徴を総体的に明らかにするためである。「不滅の嚮導」叢書を代表する作品としてはリ・シンヒョン(리신현)の「江界精神」、そして一般の長編小説としてはキム・ムンチャン(김문창)の「熱望」とホン・ソクチュン(홍석준)の「黄真伊」を選んだ。

(一)「不滅の嚮導」叢書

まず、「不滅の嚮導」叢書の一つであるリ・シンヒョンの「江界精神」(二〇〇二)の検討からはじめる。周知のとおり「不滅の嚮導」叢書は、過去に「不滅の歴史」叢書において金日成主席の生涯を小説化したのと同様、金正日国防委員長の半生と行跡を時間にとって小説化したものである。ところで「不滅の嚮導」叢書が「不滅の歴史」叢書と違っている点は、現在が頻繁に登場することだ。「不滅の歴史」叢書においては、書きはじめの当初すなわち一九七〇年代初めには、あつ

かわれている時間的背景がおもに抗日革命運動期の一九二〇年から三〇年代であった。つまり三、四十年前の過去が背景とされていたのである。ところが「不滅の嚮導」叢書の場合、なかには一九六七年直後を背景としているものもあるが、多くは十年をこえない同時代を背景として作品が書かれている。「不滅の嚮導」叢書が北の社会の内幕をどの程度あらわしているかは、リ・シンヒョンの「江界精神」を読めばある程度見当がつく。この作品には、「苦難の行軍」の時期に北朝鮮住民が体験した惨状がはつきりとあらわれている。まず露呈しているのが食糧難である。北朝鮮の食糧難に関しては、北朝鮮の外部で多く分析されているし、内部で公開されたさまざまな文献でも食料難に言及している。いまや北朝鮮内部においても食糧難は隠しとおせる問題ではないのだ。食糧難に関して、抽象的なレベルを越えた生々しい描写がこの作品には出てくる。たとえば食糧難のために父母が死に、残された子どもたちが行き場がなくなてさまよう姿の描写である。韓国で一般に「花つばめ」と呼んでいるこの「放浪児」た

ちが群れをなしてうつろっているうちに、現地指導にきた金正日国防委員長の目にとまって保護されるという場面が出てくる。この放浪児たちが父母を失ったのはまさに食料難のためだ。食糧難で人びとが死んでいくことが確認されたわけである。食料難についてはこれにとどまらない。工場で働く人びとが飯を食べられず働けない状況も、この作品には如実に描写されている。食料難に関するこのような描写は、他の小説はもちろん北朝鮮で刊行されているどの文献にも見出せないほど生々しく惨憺たるものである⁽¹⁾。

食料難だけではない。電力不足についても同様である。よく知られているように、北朝鮮は深刻な電力不足に陥っている。電力不足に関しては北朝鮮内部でもさまざまな報道がなされているが、それが具体的にどんな形で住民たちに被害をおよぼしているのかについては、把握が難しい。だがこの作品を読むと、平壤をはじめとする北の全地域の住民たちが現在どれほど電力不足のために苦勞しているかを、生々しく知ることができる。国家社会主義が崩壊する以前の一九八〇年

代に建設された光復通りの高層マンションでは、電力がないために夜も電気がつかず、女性たちが懐中電灯を常備するという新しい習慣ができ、エレベーターを利用できるかどうかを念頭において職場からの退勤時間を決めるといふ事態になる。夜も電気がなくてテレビを見ることができず、生活はますます余裕を失って、せちがらくなっていく。電力不足は一般住民の生活だけでなく北の産業施設にも大きな変化をもたらした。多くの工場が電力不足で稼働不能におちいり、労働者たちは働こうにも働けない有様である。生産施設が動かなくなると、一般生活に必要な物資の生産はもちろん、物資を購入する外貨も稼げないという悪循環がはじまる。この作品ではこうした事情がこまかく描写されており、北朝鮮で現在おこっている電力不足の実情を確認することができる。

食料難と電力不足に苦しむ北朝鮮の姿をこのように仔細に描いているものは、他では見られない。外から容易に接近できない北朝鮮社会の裏面をこうやって見ることができるのは、「不滅の嚮導」叢書ならばこそで

ある。これは、北朝鮮社会の問題点を部分的であれ言及できたのが金日成全集だけだったのと同様である。他の書物においては社会に存在する問題点を語ることでできなかった時期にも、金日成全集だけはそれができた。同じように、現在の北朝鮮社会が経験している問題は、ほかの書物では目にするのができなくても、「不滅の嚮導」叢書においては見るができる。それが可能なのは、この叢書が北の社会において、金正日委員長をはじめとする党中央の活動と展望を人民に内面化させる通路としての役割を果たしているからである。

もちろん、この作品は多くの制限をかかえており、最近の北朝鮮文学の変化を読みとるには限界があることも事実である。なぜなら、この叢書はあくまでも自己完結的で自足的な体系に支配されているからだ。「不滅の嚮導」叢書は、基本的に金正日委員長の偉業を中心として進行する作品である。先に見たように食糧難と電力不足が出てくるのも、結局はこのような困難を乗り越える過程を主導した金正日委員長の功績をひろ

く知らしめるための装置でしかない。すべての視線が一つの焦点に集められているのである。太陽のまわりの惑星たちが太陽を中心にして回っているようなものだ。これをよく示している例の一つとして、満浦地域で食糧難克服のために鴨緑江の中州に市場を開いておこなった辺境貿易に対する評価があげられる。木を伐採して外国に売り、その金で食料を購入して住民たちの死をくい止めようとする人びとの行動が、反逆的なものとして描かれている。金正日委員長が伐採は逆賊行為だと教示を下したので、これにそむくことは認められないというのだ。食糧難がもっとも深刻だった慈江道において、人びとが出した意見が、たとえ住民の飢餓を救うためであっても結局は容れられないのである。このように「不滅の嚮導」叢書は、金正日委員長の視線から逃れることは絶対にできない。この作品を支配するのはただ一つの声である。その権威的な声以外、ほかの声は入る余地がない。したがって、現実の裏面を垣間見せてくれ、他のどこにも見出せない内面を見せてくれるという価値にもかかわらず、この作品

には限界があり、北朝鮮社会の内部的多層性を読みとるには根本的に無理がある。

とはいえ、「不滅の嚮導」叢書においてさえ以前とは違った様相があらわれているという事実は、北朝鮮文学の変化が決して一時的なものではないことを示している。そもそも「不滅の嚮導」叢書にみられる最大の特徴は、価値判断が完結した過去の世界をあつかっていることであつた。「不滅の嚮導」叢書が長編小説の形式をとりながらも実際には叙事詩的な性格をもっているのはこのためである。これは、金日成主席の日帝下抗日運動を主題とする「不滅の歴史」叢書からはじまつた伝統を、「不滅の嚮導」叢書がそのまま引きついだものだ。ところが、食料難と電力不足で苦しむ住民の日常が出てくる作品においては、このような伝統を持ちこたえることはできない。価値判断が完了した状態では可能であつた叙事詩的な展望は終わり、かわりに未完結の小説がはじまるのである。リ・シンヒョンの「境界精神」に、すでに叙事詩的な性格は見出せない。もちろん作家は乖離をせばめて縫合しようとしているけ

れども、作品に描写された世界がそれをもはや許さないのだ。

(二) 一般の長編小説

最近の北朝鮮文学の変化は、一般の長編小説においても顕著である。「不滅の嚮導」ではすべてが金正日委員長の視線の下に置かれているために、むしろ負担を感じずに現実の暗黒面を描写することができたが、一般的長編小説においては、そうした試みを見いだすのは難しい。北朝鮮文学界の検閲によって、まかり間違えばブルジョア的な試みだという批判を受けることもありうるからだ。そこで作家たちはどちらかといえば注意深いやり方でこうした現実に対して発言することになるが、それもまた、いま現在の事実をあつかう場合と前近代の現実を背景にする場合とは、大きな差がある。現代を舞台とする場合は、制約が多いために、作家が直接発言するのは難しい。そこで迂回的なやり方で現実に対する批判をおこなう。これと違って、前近代を舞台とする歴史小説では、時代的な背景自体

がすでにある程度現実から外れているので、負担感が少ない。したがって作家は自分の考えをじかに表現できる位置に立つことになる。前者の代表的な作品としてキム・ムンチャンの「熱望」、後者の代表的な作品としてホン・ソクチュンの「黄真伊」を検討する。

キム・ムンチャンの「熱望」(一九九九)は大工場が舞台だが、「境界精神」で見られた食料難、すなわち工場で食事が出ないために働けなくなるような事件はまったく出てこない。電力不足についても同様である。先の作品では電力不足のせいで工場を稼働できない劣悪な状態についての描写があつたが、この作品にはその類は見られない。作家がそうした現実を目を閉ざしているためだろうか。そうではないと思う。北朝鮮の社会では、作家たちは現実を描くさいに自己検閲を行うことになる。もしや社会の暗い面を描いたことが社会批判とみなされ、自分が資本主義社会を憧憬する反社会主義的人物にされてしまうかもしれないという危惧のために、そうした現実を簡単には描けないのだ。「不滅の嚮導」叢書では可能であつたことが、一般の長

編小説では不可能になるのである。

「不滅の嚮導」叢書とちがって、一般の長編小説は単一で集中した視覚から免れている。もちろん一般の長編小説すべてがそうだというわけではない。素材が拡大しているだけで、視覚がまったく広がっていない小説も数多くあるし、場合によっては、視覚はむしろ素材さえ広がっていないものもある。しかし、社会的な問題性をもたないこうした小説とはちがって、作家の個性的な視覚を感じさせる小説も存在しており、そんな作品には「不滅の嚮導」とは比較にならないほど多層的な視覚が登場する。もちろん、こうした作品の出現には時代状況が大きくかわっている。社会的変動が激しい時期には社会的な問題性をもつた小説があらわれるものである。そのさい、小説内部の言語も多層的な言語の様相をおびることになる。一九九〇年代の北朝鮮は「朝鮮戦争以来最大の困難」という表現がとびだすほど激しい変動期であつた。このような歴史的条件のもとで出現した小説の一部には、まさにこの多層的言語の可能性が内在している。キム・ムンチャ

ンの『熱望』は、そんな傾向を代表する作品の一つである。

北朝鮮社会が経験した苦難の行軍の原因を、『江界精神』では徹底的に外部に帰していた。国家社会主義の崩壊と米国の経済封鎖のせいで、北朝鮮の社会は現在これほど苦しい状態に置かれていると見るのである。もちろん自然災害にも言及してはいるが、内部的な原因に対する言及や描写はまったくない。徹底的に自然災害と外因論に基づいている。ところが『熱望』は違っている。現在北朝鮮が直面している困難の原因として、国家社会主義の崩壊と米国の封鎖について言及しているものの、同時に社会内部の人びとの過ちも批判しているのである。ヤン・リチャン(양리찬)のような官僚主義者たちを批判し、ひいては専門性の欠如のせいで損失を蒙るような党責任秘書に対しても刃を向けている。惨禍の原因を内部と外部の両方に求める複合視覚がここにはある。食糧難と電力不足から引き起こされる悲惨な状況を描きながらも、その原因を徹底して外部にのみ求めていた『江界精神』とは明らかに違っ

ている。『熱望』には深刻な電力不足と食料難を皮膚で感じさせるような描写こそないが、その原因の診断においては「不滅の嚮導」叢書が考えおよぼぬレベルを示している。

この作品にあらわれている北朝鮮の現実にたいする新しい解釈は、「惨状の内因」にとどまらず、自力更生に関する新しい解釈にまでつながっていく。自力更生は北の社会が堅持してきた重要原則の一つである。あまりにも長いあいだ絶対視されてきたため、これに対して違う意見を出すことは決して容易なことではない。ところが、作家はこの作品において自力更生に対する根本的な疑問を投げかけている。⁽²⁾

ほかの工場で作っている電極の供給が滞ると、責任秘書はじめ大部分の人びとは、これまでの慣行通り、自分たちの工場で生産しようと企画する。自力更生といえ、いかなる条件においても自分のところすべてを解決せねばならないという固定観念を教えこまれてきた人々には、他の考えはおよびつかないのだ。ところが支配人のチェ・クアンヒョン(최관형)は電

極を輸入する方がむしろ実利にかなっていると主張する。このような主張はじつに革命的である。よりによってこれほど困難なときに外国から電極を輸入しようという主張は、正気の沙汰ではない。困難のために社会のあらゆる分野で自力更生が叫ばれているこのとき、

ぎやくに電極を外国から輸入しようというのは、まともな人間の考えることとはみなされなかった。ところが実際にやってみると、自分のところで電極を作るには費用がかかりすぎ、輸入する方が経済的であるという結論に達する。電極輸入に反対していた責任秘書すら、これに気づきはじめる。自力更生といえ、自分の工場の垣根のなかでしか考えようとしなない、あるいは国家的な枠内でしか考えようとしなない思考の慣行を、作家はつよく批判する。いまや自力更生は国家的な範囲をぬけだして世界的な次元で考えなくてはならないことを、作家はつよく要求するのである。むしろそうやってこそ、まともな自力更生を保障できるのだ。自力更生に関するこの新しい解釈は、解放後の北の歴史を考えれば、じつに画期的であるといえる。平常時に

においても画期的であるこのような考え方を、社会が惨禍を蒙っている一九九〇年代においてなしたことは、作家にとっても少なからぬ勇気を要することだったに違いない。

惨状の内因を強調する視覚と、地球的次元で自力更生を解釈する視覚、この二つが社会の問題性を帯びてあらわれるこの小説は、もはや自己完結的な世界ではない。価値評価があらかじめなされている領域ではない。新しい価値と遭遇しながら、どれがより妥当であるかを問いつづけていく世界だ。この点において、それは未完結の世界であり、前に向って開かれた世界である。「不滅の嚮導」叢書が自己完結した過去の世界であつたとすれば、この作品は模索する現在の世界である。「不滅の嚮導」叢書が単一の集中した言語であつたとすれば、この作品は多層的な言語の世界である。多層的というのは、小説のなかの言語にいくつもの声が存在してそれらのあいだに對話が成立している状態ではないが、事物の多面性を提示しうる視覚が存在していることをいう。⁽³⁾多声的言語ではない、多層的言語、

あるいは多面的言語ということができよう。筆者の見るところ、現在の北朝鮮文学には多声的小説はほぼ存在したいように思われる。現在は『熱望』のように多層的な言語があらわれるのがその最大値といえそう
だ。

キム・ムンチャンの『熱望』は同時代の現実をあつかっていたが、ホン・ソクチュンの『黄真伊』(二〇〇二)は前近代である十六世紀を背景としており、いっそうの自由を謳歌している。この作品は、韓国でよく知られている黄真伊と徐敬徳との交情はエピソードにまわし、黄真伊と下層民衆ノミとの悲劇的な愛情物語を主題としている。この作品がもっている問題の一つは、果敢な性愛描写である。もちろん作家は士大夫と僧侶たちの性愛に関する偽善的な態度を激しく批判しているし、一見すると支配層の虚偽意識を批判するためにこのような性愛描写を使つたようにも見える。しかしながら、よく読むと、性愛にたいする作家の緻密な描写は、たんに支配層の虚偽意識に対する批判にとどまらず、人間の本能としての性愛に対する正当な認

識を要求していることが分かる。

この作品は、虚偽と偽善でない性愛は積極的に擁護しており、禁欲主義が支配しているように見える北の文学界にこんな作品が出現したということ自体が特記にあたいする。この作品には露骨な性的場面が頻繁に登場して、両班士大夫の偽善をあらわしたり人間の自然な本性を擁護したりするが、読者がそれに違和感をもたないのは、この作品で追求されているのが、虚偽と偽善から解放された美しい愛とそれに基づいた性愛の賛歌だからではないだろうか。上品なふりをしながら裏であらゆる行為をする支配層とは違い、自己の本性に忠実に生きる健康な民衆の肉体性を擁護していることも関連しよう。

支配層の偽善を批判して民衆の肉体性を強調するといつても、民衆の愛を一方的に美化しているわけではない。黄真伊とノミの愛は支配層の偽善とはかけはなれた健康なものであるが、だからといって簡単に成就不再はしない。愛とは、そうした階級の問題に置き換えるにはあまりにも複雑なものだからだ。もし作家が、性

愛に関した支配層の偽善への批判に没頭するあまり、黄真伊とノミの愛を単純化して美化していたならば、この作品は既存の限界から大きく抜け出たものにはならなかったであろう。幼いときに自分を捨てて逃げた男に對して女が持ちつづけている恨めしさと悔しさ、むかしの上典である女が男に示す無意識の頑固さ、女の肉体を得ながら心を得られない男の苦しみ、抑えきれぬ思慕のためにあえて女を離れて山に入る男の心、女のために離れていく男に對して、女の心がいつしか寂しさから憤怒へと変わっていく過程など、男女の関係において存在しうるさまざまな心情と感情の機微があまりに描写されており、そこには人間に對する図式化されない省察と観察が感じられる。人間の生の複合性に對するこのような注目自体、これまでの北朝鮮文学には見られなかった成果だといえる。北朝鮮の人民がこの作品に對していただく愛情は、人間に對する作家の豊富で深い理解から来ているものである。もちろん、以前の作品には簡単に見られなかった性愛描写なども一役買っていることは間違いない。だが、より強

い感動を与えたのは、やはり人間の複合性に對する作家の省察ではなかったかと思われる。北朝鮮の読者たちは、同時代の現実でなく前近代を背景にしたこの作品に、現在を生きつつある人間の深さを感じ取っているのである。

三、「黄真伊現象」と南北交流の展望

北朝鮮の作家ホン・ソクチュンが長編小説『黄真伊』によって南の文学賞を受賞するという、過去には考えられなかった事態がおきたことで、韓国では北朝鮮の文学に對する関心がわかに高まっている。北朝鮮作品を出版した出版社の社長が拘束されていた時代のことを思えば隔世の感すらある。しかしホン・ソクチュンの受賞は、ある日突然おきたわけではない。

『黄真伊』が南にはじめて紹介されたのは二〇〇三年春である。筆者が二〇〇二年の末に平壤で出版されたこの作品を読んで南に紹介した。これまでの北朝鮮の作品とは明らかに傾向が違っていたこともあるが、それよりも、この作品の時代的背景が前近代ということ

で気楽に南に紹介でき、今後の南北文学の交流に重要な架け橋の役割を果たせるだろうという予感がしたからである。

筆者は「民族21」二〇〇三年五月号に、この作品に関する評論を発表した。以前から北の出版物、とくに北の作家同盟の機関紙である『朝鮮文学』を輸入して南の機関に提供していたある出版社がこの評論を読み、『黄真伊』を南に輸入販売して北の文学を南に知らせるべきだと考えて、ただちに実行に移した。北に打診して『黄真伊』を輸入し、その出版社の雑誌である『統一文学』にこの作品の連載をはじめた。ところがまったく予期していなかったことが起きた。二〇〇三年十二月に『黄真伊』を掲載したこの雑誌が発行されると、統一部が問題を提起した。統一部の承認なしに作品を収録したというのである。この出版社は雑誌を回収する努力をほらい、その後、統一部は出版社から正式に承認要請を受けてこの作品の内容を検討して、一カ月後に輸入販売を公式に許可した。分断後はじめて、南で政府のお墨付きを得て、北の文学作品が市販される

ことになったのである。南北文学交流における画期的な事件であった。

この本が市中の書店に並ぶと、多数の読者から反応があった。はじめのうちは多少興味本位の反応が支配的であった。この作品に見られる、男女間の肉体的結合といった、性的な描写に対する過敏なまでの反応が主流をなした。これまで北の作品にこの種の場面が多くなかったことを考えれば、こうした見方も分からなわけではないが、この作品にあらわれた、虚偽意識に対する作家の義憤や多彩で豊富な人間省察のもつ意味が、きちんと認識されなかった。大々的な関心は韓国にとどまらず米国にまで広がった。時事週刊誌タイムは二〇〇四年六月二十八日号に『黄真伊』に関する記事を載せた。

北朝鮮問題に対する世界的関心のなかでのことだったが、北の文学が時事週刊誌にまで載るのは珍しいことである。やがて、この作品に対する本格的な評論も出てきた。『黄真伊現象』はこれで終わりそうにない。出版社では『黄真伊』の輸入販売にとどまらず本格的

な南での出版を準備しており、二〇〇四年の八月十五日ころには出版市場に出る予定である。またテレビドラマ化と映画化も検討されており、『黄真伊現象』は今後も続くように思われる。この過程で南北間の版權問題に関する合理的な調整が行われることになれば、南北文化交流における基準作りにも大きく寄与することになる。『黄真伊』は南のみならず北にもかなりの影響を及ぼすことが予想される。北の作家たちの潜在的読者には、北の人民だけでなく南の市民も含まれることになるだろう。

ホン・ソクチュンの『黄真伊』は南北文学交流の重要な契機となった。南ではじめて公式に許可を受けて出た作品という点においても、またこの作品が韓国の文学賞を受賞するほど韓国の文学界に説得力をもって組み込まれたという点においてもそうである。これは、過去の南北文学界では考えられなかったことだ。とは

いえ、こんなことが起こりえたのは、最近の北朝鮮文学が変化しているからであり、その変化が南北の意思疎通をなしとげる方向に進んでいるからである。いくら韓国で北の文学を受け容れようとしても、それに応える作品が出てこなければ不可能である。ホン・ソクチュンの『黄真伊』のように南の文学界も認める作品が出現したからこそ可能だったのである。現在は前近代を背景にしたホン・ソクチュンの『黄真伊』にとどまっているが、今後はますます拡大する可能性もある。そのためにも、『苦難の行軍』以後の北朝鮮文学の変化に対する持続的な関心と分析は非常に重要である。なぜなら、今回のことは『黄真伊』がたまたま南に紹介されたから起きたのではなく、韓国文学界も受容しうる北朝鮮作品をもとめた地道で息の長い関心のうえに起きたことだからである。

註

(一) 리선현, 『강제정신』, 文学芸術出版社, 二六—三〇頁

北朝鮮文学の最近の変化と南北交流の展望 (金)

(二) 김문경, 『열매』, 文学芸術総合出版社, 一九九九, 五

七頁

(3) バフチンはトルストイ小説の多面性とドストエフス

キー小説の多声性を比較してこのような区分を試みている。

Bakhtin, Mikhail M., *Problems of Dostoevsky's Poetics*,

Trans and Ed. Caryl Emerson, Minneapolis: University of
Minnesota Press, 1984, p. 71

(4) 홍석중, 『황진이』, 文学芸術出版社, 一九九二, 三四

五—三六〇頁

(圓光大学校副教授・韓国大田市儒城区魚隱洞寄寓A.p. 一一八一—一五〇七
訳者 県立新潟女子短期大学教授・951-8127新潟市関屋下川原町一一四八〇—七)

(本稿は、第五十五回朝鮮学会大会において研究発表されたものである。)